

「黙過」とは何か

ドストエフスキーと現代

2008年10月、ジャパンファウンデーションでは、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』を新訳し、日本でミリオンセラーとなった東京外国語大学学長・亀山郁夫氏をモスクワに派遣し、ロシア人気作家ボリス・アクーニン氏との公開対談を実施しました。その成果をふまえ、なぜ今日あらためてドストエフスキーが読まれているのかをテーマに、亀山氏にご寄稿いただきました

かめやま いくお
亀山郁夫
東京外国語大学学長



かめやま いくお ●東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程および東京大学大学院人文科学科博士課程単位取得退学。近著に『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する』『ドストエフスキー一謎と力』。翻訳ではドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』など

「神は死んだ、
身体は死んだ、
人間が神になった」

ドストエフスキーが、いま多くの人と共に読まれている理由をどこに求めるべきなのか。もちろん、それは、日本の社会が現に向かいあっているグローバル化の状況と切り離しては説明でき

ない。世界が、強者と弱者という二つの世界に分断されつつある状況が、半ば無意識のうちに、19世紀ロシアの二極化の時代への連想を誘っているのだ。二極化のなかで生まれた文学が、ドストエフスキーだったのである。ドストエフスキーは、初期の作品から常に弱者や貧しい人々の立場に立つて世界を描いてきた。彼の文学とは何

よりもまず疎外された人々の、強者の列に加われない人々の悲哀の物語だった。

しかし同時に、強者への怨念にからめとられた弱者が、時として恐ろしい強者になりかわることがあることを明らかにしようとしていた。そして、弱者が強者となりかわる瞬間には、かならず「錯乱（ナドルイフ）」が伴うという事実をも。そして「錯乱」のひとつの帰結として、暴力と殺人が浮かびあがってきた。いかなる弱者も、人を殺すことを決意した瞬間、殺意が他者にもたらす恐怖において、強者になりかわる。あるいは神になりかわると言ってもよい。これは、アルベール・カミュが『反抗的人間』で明らかにした真実である。

もっとも、「錯乱」は、弱者の世界のなかにはみはびこっていたわけではない。得たいのしれないウイリスのように、農奴解放後のロシア社会を、貴族社会から修道院の内部まで覆い尽くしていた。ウイリスとは、錯乱によって反転させられたすべてのものを意味し、欲望、自由そして傲慢が人々の心を引き裂いていたのだ。

この問題を、現代に引き寄せて考え

作家ボリス・アクーニン氏と語り合う筆者。アクーニン氏はサスペンス色の強い小説でロシアで絶大な人気を誇り、日本でも『堕ちた天使—アザゼル』『リヴァイアサン号殺人事件』などが翻訳されている。日本文学研究者、文芸評論家としても知られる



てみよう。

2001年9月11日、わたしはロンドンにいた。同時多発テロとツインタワー崩落のニュースを知ったのは、その日の午後4時、ロンドンの地下鉄のなかである。ロイヤル・アルバートホールで毎夏開かれるBBCプロムスのコンサートでは、ベートーヴェンの交響曲第三番第二楽章が演奏された。ツインタワーでは多くの英国市民が犠牲者となったからだ。コンサートから慌ててホテルに戻ったわたしは、タワー崩落のシーンを飽かず眺めつづけた。翌朝、なおも流れつづけるビデオ画面を横目で見や

りながら、PCの画面に次の文字をきさんだ。

「神は死んだ、身体は死んだ、人間が神になった」――。

何とおごり高ぶった言葉か。ただ、この恐ろしい瞬間の存在証明としてわたしはこう書くしかなかったのだ。そして、そこにこめた仮説とは次のよう

なものだった。神が、仮に存在するとするならば、けっしてこれほどの悲惨に人間を出会わせることはしない。現に人間が、このような悲惨に出会っていないという事実は、最終的に神が存在しないことを意味する、神は、人間を見捨て、人間は、神に見捨てられた。神は、この悲惨を「黙過」したのだ。この言葉を書き記しながら、わたしはなぜかしきりにドストエフスキーのある小説を思い浮かべていた。

「リンゴを食べてしまった」 大人たちの 生命はどうなるのか

ドストエフスキーは、ある時点から、神の不在、あるいは神の「黙過」というテーマにかなり自覚的になった。わたしの考えでは、そのきっかけとなったのが『悪霊』であり、その仕上げとなったのが『カラマーゾフの兄弟』である。

『悪霊』の主人公スタヴローギンは、自分が陵辱した少女が、アパートの中心の物置小屋で首を吊ろうとしているのを知りつつ、黙過する。物置小屋に向かつて歩いていくその姿をアパートの上階から見下ろすだけである。もし

かすると、彼はそのとき、心のなかでこうつぶやいていたのではないか。神よ、出てこられるものなら、出てこい。神はついに、現われず、神の代行者となった彼も助けに行かず、少女は首を吊る。

『カラマーゾフの兄弟』では、黙過のテーマが一方できわめて思弁的な性格を帯びる。第二部第五編「プロとコントラ」の章をご記憶の方も少なくないだろう。イワン・カラマーゾフが、虐げられた無垢たちのエピソードを次々とあげつらう場面である。それはまさに、神の不在を、神の「黙過」を糾弾するねらいだった。

ブルガリア人の赤ん坊を銃剣で刺し貫くトルコ人、飼い犬を汚させた子どもを100匹の猟犬でかみ殺させた地主、どれほど残酷なイメージや映像になれたわたしたちにとつても、目を背けたくなるようなエピソードばかりである。イワンは、親に残酷な仕打ちを受け、「だれを恨むでもなくおとなしく涙を流しながら、自分を守ってください」と『神ちゃま』にお祈りしている」少女を代弁してこう叫ぶ。

「最高の調和なんてものをすっぱり撥ねつけてやるんだ。そんなものは、：



2008年10月25日、高等経済大学付属コンフェレンスホールでの作家ボリス・アクーニン氏との対談

文学対談「グローバル化時代に生きつづけるドストエフスキー」
講演会「現代日本でなぜドストエフスキーは甦ったのか？」 (開催地：ロシア・モスクワ)

講演会「現代日本でなぜドストエフスキーは甦ったのか？」

日時：2008年10月24日(金) 17:00～19:00

場所：ロシア国立外国文献図書館 オバーリヌイ・ザール

対談「グローバル化時代に生きつづけるドストエフスキー」

日時：2008年10月25日(土) 14:00～16:00

場所：高等経済大学付属コンフェレンスホール

…あの、さんざ苦しめられた子どもの、一粒の涙にだって値するもんか！」
イワンがここで叫んでいる「最高の調和」とは、むしろ、キリスト教が約束する神の国である。
ところが、そのイワンが、唾棄すべき父のフォードルに対して、どうい

態度をとることができたのか。ここから彼のなかで、信念と心情との間での悲劇的な矛盾が露呈しはじめる。その露呈を覆い隠そうとして、イワンは一種の二分法を盾にとった。

「おれは、大人の涙の話なんかする気は、さらさらしないさ。やつらはもうリngoを食べてしまったんだから。どうでもご勝手にさ」

イワンの考える人間の生命の尊さは、子どものなかにしかない。では、「リngoを食べてしまった」大人たちの生命はどうなるのか。イワンによれば、それはもはや絶対的な価値を持ちえない。アリョーシャに対しては、大見得を切つて見せたイワンも、そのじつそうした自己矛盾に気づいていなかった。アリョーシャとの会見を終え自宅に戻ろうとした彼を、下男スメルジャコフが呼びとめ、長男のドミートリーが明日にも父親を殺してしまいかねないと予告する。

イワンは、そうした状況が起こることを予測しつつ、翌朝、カラマーゾフ家の屋敷を出て、モスクワに旅立つ。屋敷を出るといふ行為は、父親の死、ないし父親殺しの可能性に対してみずから道を開くことを意味する。

なぜドストエフスキーは「黙過」の問題にこだわったのか

ここで一つ興味深いディテールに注目しよう。

出発の前夜、イワンが中2階の部屋から階下にいる父親の動きに何度も耳を傾ける場面だ(「毎回5分くらい」)。そして作者は、その行為を次のように説明する。

「この『行為』を、彼はその後一生をとおして『けがらわしい』行為とよび、生涯をとおして一人ひそかに、心の奥で、自分の全人生でもっとも卑劣な行為とみなしつづけた」

イワンはなぜこれを「全人生でもっとも卑劣な行為」とみなしたか。それはほかでもない。遺産相続をめぐる卑しい欲望のとりことなった自分の真の欲望を自覚できないまま、迫りくる父親の死を「黙過」しようとした行為の「卑劣」さである。

では、ドストエフスキーはなぜ、ここまで「黙過」の問題にこだわり続けたのか。わたしはいまこんなふうな想像にふける。それは、彼が、物置小屋で首を吊る『悪霊』の少女や、下男に



筆者の新訳による『カラマーゾフの兄弟(全5巻)』は大きな話題になった。現在、同じく新訳の『罪と罰(全3巻)』が刊行中

殺される『カラマーゾフの兄弟』の父親(なぜフォードルと名づけられたのか?)のように、ある時点で、神に見捨てられた(あるいは、そう感じた)瞬間があったからではないのか、と。では、あるとすれば、それはいつのことか。

答えは、1849年12月21日、彼に死刑宣告が下された日である。死刑執行の現場に立たされた瞬間、彼は、絶望的な孤立感を味わっていたはずである。そのとき、彼の心のなかで、「なぜ、われを見捨てたもう」いや、「神よ、出てこい」という言葉が生まれなかったという保証はどこにもない。では、この瞬間、彼に恩赦を下した皇帝ははたして神の代理人となったのだろうか。それとも神の僭称者にすぎなかったのか。いずれにせよ、

この瞬間、彼のなかで、後年の長編小説が必然的にはらまざるをえなかった黙過のテーマへの関心が生まれたのだとわたしは考えている。

個別の魂、個別の身体を ひたすら想像する営みこそ 現代の文学の役割だ

では、「人間が神と化した」時代に

おける「黙過」とは何か?

それこそは、9・11が、象徴的に現出した事態、いや、それを目撃したわたしたちの精神の現実ではなかったらうか。他者の苦しみにいつさい無関心になる精神状態はありとあらゆる場所で生まれる。マンハッタンは、バグダッドの、チェチェンの代名詞なのだ。生命とは、何にかえがたい価値をもつとだれもが信じながら、それでもその真実を超える何かの時として現出する。生命の価値が重んじられれば、られるほど、テロルは絶大な効力をもちはじめる。テロルを、暴力を加えようとする人間は、生命が、罪なくして涙を流す少女の肉体そのものであることに気づかない。

『悪霊』のスタヴローギンが、一人の少女の死を「黙過」するためにアパートの4階で過ごした35分間に、マンハッタンでツイインタワーの崩落が起こり、北オセチアの小学校で200人の児童が犠牲になる。完全に第三者の立場から見るものは、崩落のシーンに美的なエクスタシーすら催すかもしれない。この「第三者」こそが、現実の世界であり、少なからず、われわれの現実でもあるのである。

スーザン・ソントアグの本から引用しよう。サラエヴォの住人たちが、フオートジャーナリストに向かって叫んだ言葉である。

「あんなたちは爆弾が炸裂したら、もつとたくさん死骸が写せると待っているのか?」

ソントアグは、こう総括する。彼らが欲していたのは、「自分たちの苦しみが自分たちに特有なものとしてみられること」であったと。

では、仮にサラエヴォの現場に立つことができたとして、イワン・カラマーゾフは、それでもこう囁くことができたろうか。

「やつらはもうリングを食べてしまったんだから。どうとでもご勝手にさ」

一瞬のうちに計り知れない大量死を可能とする現代は、まさに苦しみを受ける主体としての人間の身体、より正しくは個別の身体が死んだ時代である。現代において文学がなすうる役割とその意味は、レンズでも、ガラス窓でも、テレビの画面でもなく、文字という格子縞の網の向こうに、個別の魂、個別の身体をひたすら想像するという原始的かつ根源的な営みそのもののなかにある。☺